

翌朝目が覚めると、太陽は既に高く登っていた。

歩き詰めだったこの2日間、早朝3時に起きて稲城を出た翌日は、洛絨牛場の物置小屋で寒さに震えながら浅い睡眠をとっただけだ。久しぶり(?)に、暖かい布団にくるまりグッスリ眠れた余韻にひたりながら、じんわりと昨日の疲れが残る身体を起こすと同宿だった他の宿泊客達は皆出払ってしまった後だった。

ガラんとした部屋の中で、私は暫くの間所在なくボンヤリとしていた。この一人旅が始まった時から最大の目的にしていた宝石の湖探訪が終ってしまったこの朝は、どこか旅の目標を見失ったような気が抜けた気分になっていた。今日は何をして過ごそう……。とりあえず思い浮かぶのは沖古寺の近くに美しい湖があるという景勝地「^{チンジュハイ}珍珠海」だが、どんよりと曇った空からは時折小雨がパラついてた。

こんなお天気ではいそいそと出かける気にもなれず、部屋に置いてあった魔法瓶のお湯にタオルを浸して身体を拭くと、少しスッキリした気分になってきた。今日の予定が沖古寺から歩いて小一時間程だという珍珠海に行くだけなら慌てる必要は無い。亜丁で過ごす時間はたっぷりあるのだ。雨がやむのを待ちながら荷物の整理をしていると、昨夜の食堂で私が汁麺を食べている時から見かけていた、ここの宿主夫婦の一人娘らしい少女がソロ〜っとやって来て部屋の中を覗き込み、私と目が合うと逃げていった。

およそ3、4歳といった年頃だろう、チベット族には珍しく思える色白のお人形のように可愛らしい女の子で、ちょっと我儘そうな顔立ちときれいな服がいかにも裕福な家庭で大事にされているお嬢様の雰囲気だ。地面と見分けのつかないほど泥にまみれた、山の生えてきたばかりのキノコのようなこの辺りの子供達とは明らかに一線を画している。少女の顔を見ていると、ここの宿主夫婦はチベット族ではなく漢民族なのかもしれないなと感じられた。そう思えば彼らのわかり易い強欲さ加減にも納得がいく気がした。

見慣れぬ異邦人の私に子供らしい興味を抱いたのか、先程逃げていった少女は暫くするとまたコソ〜っとやって来て部屋を覗いては逃げていく。雨で出かける気にもなれずに退屈しかけていた私も段々楽しくなってきた。ザックの中にしまっぴりなしになっていた折り紙を取り出し、再びやって来た少女に見せてから折り始めた。

少し離れた場所で何が始まるのかと息を詰めて覗き込んでいる少女に折り鶴を折って差し出すと、嬉しそうにそれを持って逃げて行き、案の定しばらくすると再び戻ってくる。全く世界中の何処に行っても子供のやる事は同じだ。行ったり来たりしている少女に思いつくまま色々な物を折ってあげているうちに、打ち解けてそばに寄ってきた少女は、折り紙の包装紙の裏側に書かれていた馬の作り方を見つけ

ると「これを作って」というように指差してみせた。

なるほど亜丁の子供にとって馬は一番身近な動物だ。外国語で書かれた折り紙のイラストでもピンとくるものがあったのだろう。説明書きと睨めっこしながら苦心して作った馬は、折り紙2枚を使用し胴体と頭の部分を別々に折ってから、それらをつなげる凝った作りで、なかなかリアルだった。折りあがった紙の馬に少女は歓声をあげるとそれを持って母屋の方に消えていった。

少女に折り紙を折っているうちに、いつしか雨はあがって空には薄日が差していた。

太陽の光って素晴らしい。先程まで曇り空の下、気だるい気分でもボンヤリしていた私もお日様に照らされた地面を見るとまたワクワクして動き出したい気持ちが甦ってくる。さあ、まだ見ていない場所の亜丁探検に出かけなくっちゃ!!

ハイキング用の小さいザックに飲料水や雨合羽、携帯食料詰め込んで母屋の方に出て行くと、先程の少女が入り口のテラスに折り紙をいっぱい並べて遊んでいた。

ヒヒーン!パカパカパカ……

口で馬の鳴き声を真似ながら折り紙の馬に跨っている娘の様子に、宿の親父が相好を崩しながらやって来て

「小姐!これはあんたが作ったのかい!?上手いもんだ。彼女は馬がお気に入りだよ」

と父親の笑顔を見せていたかと思うと、おもむろに揉み手の商人の顔に早変わりして

「ところで、食事は如何かな?何かちょっと食べていけよ」と私の顔を覗きこみニヤニヤして見せた。まったくその変わり身の早さと商魂の逞しさには脱帽だ。私は思わず吹き出した。

「今はいいわ。食べ物も持ってるから。それより珍珠海へはどうやって行くの?」

親父は裏山を指差して、あっちの方へ歩いていけば判るよと言った。

雨上がりの道は空気が美味しかった。この場所の地名ともなっている、宿の裏手にある沖古寺を見学させてもらった後、林の中の山道をのんびりと登った。しばらく行くうちに林が途切れ、石がゴロゴロとした枯れ沢の流れ跡に沿う広場のような場所にでたが、立て看板一つ無く何処に珍珠海があるのかまるで判らない。

広場の回りを覆う低い灌木の茂みの中には道なのか動物の踏み跡か、大雨の増水時に流れた水の跡なのか判然としないような道筋がいく本も茂みの奥に向ってのびていた。気の向くままに適当な道筋をたどっていくと灌木が途切れてポッカリと美しい場所にでた。

箱庭のようにごちんまりと起伏のある地形には古い倒木や大きな岩を覆っている苔の上に可憐な野草が小さく伸び、ま

るでデザインされたように箱庭の中に配置されている。築山のような小高い丘の上には一本の大きな木が茂っていた。木の下に倒れている太くて乾いた倒木はまるでそこに訪れる者達のために用意されたベンチのようだ。

うわあ～、ムーミン谷みたいだあ～。

私と同じ世代の者なら誰もが知っている、北欧の作家トーベ・ヤンソンが描いた童話「ムーミン」の故郷がムーミン谷だ。読書好きだった子供時代から私はこのシリーズが大好きで、すっかり大人になった今までの間に何度図書館で借りたか判らない。個性的な登場人物や、穏やかさの中にほんのりと寂しさを感じさせるどこか風変わりなストーリーも魅力的だが、不思議とそれよりも印象深いのはまるで目の前に風景が浮かびあがってくるような、色鮮やかで細やかなムーミン谷の自然の情景描写だ。

・・・しっとりとした青い苔の柔らかさ、去年の落ち葉の茶色い敷物に木漏れ日の差し込む曲がりくねった小道、日の光で暖まった木の幹の感触……。子供時代から繰り返し読み返し、心にその風景を思い描くうち自分でも知らない間に出来上がっていたらしいムーミン谷の情景に、私は思いもかけず北欧とはかけ離れた中国奥地の山中で出会ってしまったのだ。時折風が吹くたびに灌木の茂みがザワザワ揺れる他、辺りはまったく静かだった。小高い丘の木の下に座りゆっくり風景を味わうと、私は日溜りの中で目を閉じた。風が耳元でサワサワなっている。

ああ・・・ここが私の場所だったら・・・。もし私がこの土地で生まれたチベットの少女だったら・・・きっと時折、村を抜け出して一人でここに来るんだろう。一人でゆっくり物思いにふけったり、仲良しの友達とやってきて秘密の話をするのかも。そしてある時は村人に知れないようにこっそりと、ほのかに思いを寄せ合う男の子とやって来てこの倒木のベンチに座って長い時間話をするのかも・・・

三年前のあの時、花園に並んで座っていた少年と少女の姿が目裏に浮かんできた。この土地に生きるチベット族の少女達が羨ましい……。なんといったってこの土地はロマンチックな場所がありすぎる。小高い丘の日溜りで幸福な空想の世界に浸りながら私の心はすっかり乙女になっていた。

時折強く吹く風に震える木立がザワザワと鳴っていた。私は自分が何処にいるのか思い出すと再び珍珠海を探して歩き始めた。周りは私の背丈よりも高い灌木の茂みに遮られ、迷路の様に入り組んで続いている幅50cm程の小道？からは全く先の視界は利かない状態だ。

亜丁の中では名の通った景勝地の珍珠海が、こんなに判りづらい場所に在るはずは無いように思えた。きっとどこかで方向が違ってしまったのだ。だが私はこの何処へ通じているのか判らない迷路の探検が面白くなってきたところなので、行けるところまで進んでみたい気分になっていた。

見通しは悪いが両脇を高い山に挟まれた狭い谷底のこの

土地で、道に迷う心配はなさそうだ。左手に聳えているのは、初日落絨牛場に向かう道のりで眺めていた、鬼が島のように岩がゴツゴツと天に向かって角を振り立てている五百羅漢の岩山だ。戻る時にはこの岩山が右に見えるように茂みの中を歩いていけば自然に沖古寺の方向に出られる筈だった。

だが私は進むにつれて段々と、何故だか薄っすら恐くなってきてしまった。先程まで明るかった空は再び曇り空に変わり始め、進めば進むほどその場所から感じられる威圧感のようなものに身体を押しさえつけられる気持ちになってくる。

不安と好奇心がせめぎ合う気持ちをなだめながら、それでも小道を進んでいくと突然目の前の灌木が切れ、目の前を枯れた沢が横切っている場所に出た。そして私の眼に飛び込んできたのは目の前に厚くつもっている砂山から立ち上がり、どこまでも聳え立つ巨大な岩盤の壁だった。見上げた岩盤の上部は厚い霧に包まれて見えてはいないが、岩盤の下部には崩れてきた岩や砂利や砂が積み重なり、それを伝って少しその岩盤をよじ登れば手で触れる事もできそうな高さにまで氷河が岩に齧り付いているのが霧の中から透けて見えていた。

金縛りにあったように暫く動けなかった。仙乃日だシェンナイリー……。

厚い雲と霧に覆われた神山のほんの少し覗けている麓の岩盤さえ灌木の茂みに遮られ、私は知らず知らずのうちに土地の人々が神と崇める亜丁三大神山の最高峰が立ち上がる裾野のどん詰りまで真っ直ぐに歩いて来ていたのだ。

亜丁を訪れたのはこれで2度目だが、私はこれまで仙乃日の姿を殆ど見たことがなかった。いつも厚い雲に覆われている霊峰は、はるか彼方に雲の割れ目からその頂きをチラッと覗かせている程度でしか眺めた事が無く、正確にこの場所から聳え立っているのかもあまり良く判っていなかった。亜丁に到着した日にアーロン達と眺めた仙乃日の頂きは、もっとずっとずっと遠くにあるように感じられていたのに……。

何処からかザワザワと沢の流れるような音が聞こえてくる。山全体を包んでいる霧の中から岩肌を伝って氷河から流れ落ちる水がいく筋かの細い滝となって滑り落ち、山裾の砂に吸い込まれているのが見えた。私が立っているこの枯れ沢は亜丁の長い冬が終わりを告げ峰上の雪が融ける頃、流れ落ちた雪解け水の川になるのだろう。

頭上から聞き覚えのある、あの音が響いていた、

ゴトッ……ゴゴゴゴ……

まるで遠雷のように低く轟く山の唸り声だ。神の山が私に向かって話しかけているような気がした。

ああ……神様……。

私は思わず頭を垂れ、神山に向かって祈りを捧げた。

(次号に続く)